

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報

第29号



事務局：東京学芸大学心理学研究室内 〒184-0015 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL. & FAX. 0423-27-2890



LDへの朗報！

国際医療福祉大学言語聴覚障害学科

大石敬子

言語はコミュニケーションの道具であるとともに、学習の道具です。コミュニケーションに支障があるとき、私たちは言葉の問題に早く気付きます。しかしそれ以外の場合私たちは子どもがもつ言葉の問題にあまり気付きません。子どもたちをみて、たとえ非言語性LDで算数に問題をもったり、多動児の場合も、その背景に言語の問題が色濃く働いていることに気付きます。

言語発達は青年期まで続きます。特に学童期に達成される言語発達の中身は、学校の学習や社会での人間関係の維持に深くかかわります。例えば授業のとき頻繁に使われる埋め込み文（「先生が黒板に書く文字を写しなさい」など）や複数の文章を統合して理解することなどは学童期になって熟達します。相手が何を知りたいのかを考えて会話するのも学童期からです。これらは日常生活のコミュニケーションにはさして必要ないものの、学校の学習や人間関係の維持には不可欠です。

このようにコミュニケーションに必要な言語と学習に必要な言語は段階的に異なります。重要な

ことは学童期の言語発達の多くが教科書などの書物を読むこと、作文や日記など文章を書くことによって促進されると考えられることです。

多くのLD児はたとえ非言語性であっても、おしなべて読み書きは不得意です。学習に対する意欲が薄く、文章を読むこと書くことに馴染みにくい、そのために学童期の言語発達が進まない、それがさらに読み書きを遠ざけるという悪循環を作ります。多くのLD児に言語を学習の道具として使いこなすための地道な働きかけが必要です。

さて、LD児にとって朗報があります。昨年国会において、言語聴覚士の国家資格が定められたことに伴い、言語聴覚士を養成する学校のカリキュラムと国家試験の出題基準が定められました。そしてその両方に学習障害の項目が含まれました。従来STは幼児期の言語の問題を主として扱い、学童期の子どもの言語の問題への関心は低い傾向にありました。しかし今後は多くのSTがLDへの関心を高め、指導に携わることが期待されます。